

創立35周年記念演奏会を鑑賞して～印象記 村田 雄穂



本協会創立35周年を記念する演奏会が6月3日に開催されるとの案内をいただき、私はすぐに、それまで地元で入っていた仕事の予定をキャンセルし、最優先で札幌へ行く計画を立てました。札幌で夕方から夜に行われる催し物に出席するには、私の住む帯広からだ、一泊二日の日程を組まなければなりません、プログラムを知り、これは絶対に見逃すことのできない機会だと思ったのです。

今回の演奏会のテーマが「ショパンと華麗なるポーランド音楽」となっていますが、二部構成で、独演者、連弾演奏者、伴奏者を合わせて、なんと十五名の音楽家たちが、次々と演奏を繰り広げました。これだけの人数で紡ぎ合わせるポーランド音楽の奥深さと多様さは圧巻でした。2時間ほどの時間があっという間に過ぎて行ってしまいました。

第二部の冒頭で、三浦洋先生が、2021年の「ショパン国際ピアノコンクール」を引き合いに、日本におけるショパンの圧倒的人気に言及しておられました。私も前回のショパンコンクールの経過を、YouTubeの配信でかなりの時間観ておりましたが、私が約5年前に本協会に入会したのも、ショパンのバラード4部作にとりわけ感動し、またそれと関連して、アダム・ミツキューヴィチの文学にも触れたのが動機の一つでした。

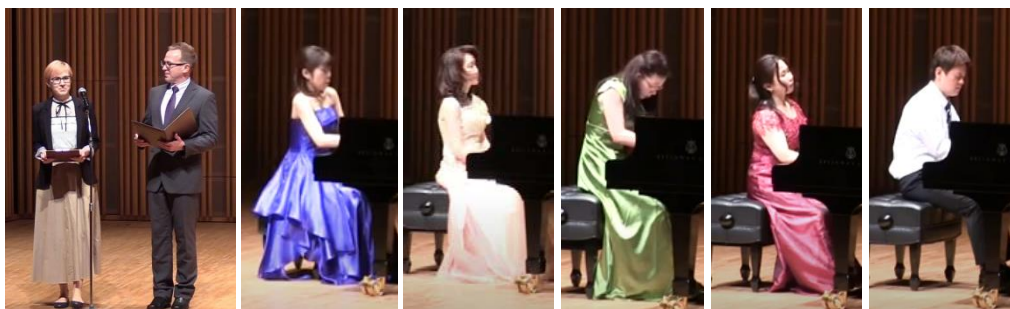
でも、「ポーランド出身の音楽家はショパンだけではないのだ」ということも、この数年間に徐々に知るようになり、今回の演奏会でもそのことを再認識させられました。第二部で演奏された、ヴィエニャフスキ、モシュコフスキ、カルウオーヴィチ等の作品を、初めて生演奏で聴く機会を持てたことは、本当に

貴重な体験で、とても有難く思っています。そして、彼等以外の音楽家もたくさん居ることは知っていますが、それらの曲を生演奏で鑑賞できる機会が少ない、特に帯広では皆無に近いのは残念です。でも、できる限りの手段で、ポーランド音楽をもっと知り、鑑賞していきたいと思った次第です。

演奏会後は、中島公園内を余韻に浸りながら数分間歩き、公園に隣接する宿に戻りました。そして独りで、先ほどの残響の中を漂うのです。残念ながら、私は、まだ一度もポーランドに行ったことは無いのですが、気分だけはポーランドに来ているような想いに耽りながら。札幌までクラシック音楽を聴きに来ることは年に数回あるのですが、夕方の公演の後に、地下鉄や列車に乗ったり、外食をしったりはしません。知人と感想を述べ合うこともしません。感動がぶち壊しになってしまうような気がして。

最後に、この演奏会の企画と実現に向けて大変なご苦勞をなさった会長以下、運営委員の皆さま、そして舞台上で素晴らしい演奏を披露してくださいました演奏者の皆さまに心より感謝申し上げます。そしてまた、次回の周年行事を楽しみにしております。

(むらた・ゆうほ、会員)



=写真=(挨拶) ジェブカ・ラファウ&ガイダ・ズザンナ(第1部) 徳田貴子, 本田真紀子, 田口綾子, 西村範子, 中島幸治(お話) 三浦洋(第2部) 徳田和可&安藤むつみ, 坂田朋優&鈴木飛鳥, 高橋可奈子&畑端梓, 松井亜樹&高橋健一郎, 水田香&北浦由花里